

アコースティックギターの心地よいサウンドにのせて美しい歌声を響かせる「モンチラ」は、小学校のときからの幼なじみの門間さんと千葉さんが演奏する、フォークデュオです。

結成したのは、平成十九年四月。門間さんのお姉さんの結婚式の余興で、二人で演奏したことがきっかけでした。もともと趣味でギターを弾いていた二人ですが、人前で演奏することはなく、初めて大勢の人を前にして歌を歌ったときの気持ちよさが忘れられず、路上で弾き語りをするようになりました。

オリジナル曲は十五曲ほどありますが、すべての曲はどちらかが一人で作詞・作曲を行い、最後に二人でアレンジを加えて完成させるそうです。「お互い違う感性を持っているので、それが曲に表れておもしろいんですよ」と、千葉さんは、二人の個性を引き出す曲作りの思いを語ってくれました。

こうして出来上がった自分たちの



▲①昨年10月4日、古川駅でのDCオープニングイベントでも演奏し、DCの開催を盛り上げました。②息がぴったりな二人は、毎週水曜日の午後8時ごろから、古川駅の前で弾き語りをしています。

曲を古川駅の前で演奏していた時、仙台・宮城デスティネーションキャンペーン(以下DC)関係者の目にとまり、「DCのイベントで歌ってみないか」と誘われます。この出会いをきっかけに、DCのオープニングイベントやリゾートトレイン「みのり」の車内ステージで歌うことになり、「電車に乗って」というタイトルの曲を作って披露しました。千葉さんは、「子どもから大人まで、みんなが曲に合わせて手拍子してくれたのがうれしかったです」と話してくれました。

今後は、ライブハウスや各種イベントなどでも誘いがあれば積極的に演奏したいと、意欲十分です。

「自分たちの歌を聞いて共感してくれたり、音楽はこんなにも素晴らしいということが伝わればうれしい。いろいろな人と一緒に楽しみたいので、ぜひ一度演奏を聞いて欲しいですね」と話してくれたモンチラ。彼らの優しいメロディーは、聞く人の心を和ませてくれます。

心に響く優しいメロディー



幼なじみフォークデュオ (古川地域)
モンチラ (左: 千葉 慎也さん 右: 門間 大輔さん)

このコーナーでは、「大崎ライフ」をより楽しむための物や技、場所などを毎月紹介していきます。



庶民の足として人気を呼んだ 松山地域発「松山人車軌道」

「人車」という乗り物を知っていますか？現在のJR松山駅と町中心部を結ぶ区間に、かつて「松山人車軌道」が存在しました。人車とは手押しトロツコに簡単な車体を取り付けて客を乗せ、人が押してレール上を走る車です。

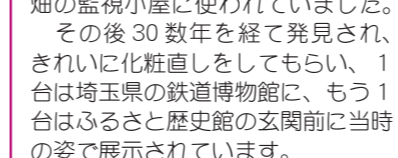
明治四十一年、町民待望の東北本線松山町駅が開業しました。しかし、駅は町の中心部から約二・五km離れていたため、人々は駅への往復に苦労していました。その間の交通機関として用いられたのが人車でした。

人車は、明治中期から昭和三十四年まで全国で二十九路線が存在しました。大正末期には自動車の発達などにより消滅しつつあるものでしたが、松山では地域の条件に合う最も経済的な交通として人車を採用することにしました。鉄道省では、今更人車もないだろうと渋い顔でしたが、「将来速やかに他の動力に切り替えるべし」との条件付きで許可がありました。こうして「松山人車軌道」



街中を走る人車 (現在の酒ミュージアム付近 昭和2年ごろ)

人車の発見と復元
廃業当時4台あった人車。2台は解体されましたが、1台は保存のため上野館跡の稲荷神社境内に置かれ、1台は小牛田(現美里町)の梨畑の監視小屋に使われていました。その後30数年を経て発見され、きれいに化粧直しをしてもらい、1台は埼玉県の鉄道博物館に、もう1台はふるさと歴史館の玄関前に当時の姿で展示されています。



▼梨畑から搬出される人車(昭和47年)

現在では復元された人車が、松山ふるさと歴史館と埼玉県の鉄道博物館に展示されています。また、「コフモス祭り」などの地域イベントでは複製車走らせ、車夫がお客様を乗せて人車を押し、当時の再現しています。

固 松山ふるさと歴史館 ☎ 55-2215

は設立され、大正十一年十一月に開通式が行われました。

松山人車は定員八人、満員の時には十五人ほどが乗れたといわれます。運賃は大人二〇銭、子ども一〇銭で、米一升が二〇銭ほどの当時としては決して安いものでありませんでしたが、人々にはずいぶん利用されていたようです。以来、昭和四年の廃業までの約六年間、人々の貴重な足として活躍しました。

今年二月六日、経済産業省の「近代化産業遺産群続33」に「松山人車軌道」が認定されました。産業遺産は明治から昭和にかけて、日本の近代化の礎となった産業の歴史を再認識し、地域活性化につなげることを目的としたものです。